

牛島の藤

東武野田線「藤の牛島駅」から500^{メートル}ほど西に歩き、県道松伏線の左側を入ったところに「藤花園」があります。

藤の根元は腐り、原形はわかりませんが、根元の周囲は約4^{メートル}、根廻りは約9^{メートル}ほどもあり、藤棚は東西に34^{メートル}、南北に17^{メートル}もある大きなものです。

この藤は「野田フジ」の一種で花房は、2^{メートル}ほどの長さになります。樹齢は1、200年以上で、伝説では弘法大師のお手植えともいわれています。

昭和30年、国の特別天然記念物に指定された「藤花園」は、蓮花院跡と伝えられており、藤の所有は蓮花院（廃寺）から田中源太郎氏、藤岡氏へと移り、現在は小島すい子氏が管理しています。

明治33年5月発行の「粕壁藤の紫折しおり」に、大和田建樹が「牛島の藤」と題し、紀行文を寄せていますが、その一節に「藤は一つの幹より枝さしひろがり、長さ18間、幅5間の棚にぞ作られたる。それより幾千幾万

ともなき花房氷柱の如く滝波の如くしな垂れて。下いく少女の顔に映つしあいたるさますべていふべくもあらず。桜は吉野といへど。梅は月瀬といへど藤の名所はまだ知らぬを、あにおもはんや帝都を去る十里の地にして此見ものあらんとは花房の長さ去年に劣れりといえど。なお4尺はあるべし、30年来の木なりというも遠くはたがはじとぞ思う。」

と讚美しています。

詩人三好達治の詩集の中にも「牛島古藤歌」があり、その一節にも

ゆく春のなかき花ふさ

花のいろ揺れもうごかず

古利根の水になく鳥

行々子啼きやまず

メートルまりの花の丈

匂ひかがよう遅き日の

つもりて遠き昔さへ

何をうしじま千とせ藤

はんなり、はんなり

とあります。

昭和初期の長谷川零余子は、

人の世のいさかいは知らず藤の花

人の目に藤たれて虻のうなりかな

と牛島の藤を詠んでいます。

このほか地元の古老からの語り伝えによる話もあります。

隣村である樋籠村柳原の豪農の家で、一人娘が長い病気で苦しみ家中が悲嘆に閉されていました。そんなある日、旅僧が村を訪れ、布施を頼んだ。

取りつぎの者が主人に伝えると主人は神仏への祈願に一縷の望みいちるを託し、旅僧を一泊させ厚くもてなした。ところが、夜中に娘が苦しみ出し大騒ぎとなった。

夜が明けると旅僧は主人に、

「この家の生垣の中に藤の一株があるはず。お娘の病は、その藤の災いによるもので、藤はもと故ある者の権化であろう。もし、お娘がかわいかったら、すぐその藤を堀り取って、菩提寺に納めるとよい。そのまま捨て置くと、この家は根絶する。」

と言い終ると立ち去った。

家人はこれに驚き、すぐさがして堀りおこし、菩提寺に費用と土地を寄進して、納めたので助かったという。

初出「広報かすかべ」昭和五十六年四月「かすかべの歴史余話」